

伊藤整全集

第三卷

河出書房

伊藤整全集 第三卷

昭和三十一年九月一日 第二次初版印刷
昭和三十一年九月五日 第二次初版發行

定價 貳百七拾圓
地方定價 貳百七拾五圓

著 者 伊 藤 整

東京都千代田區神田小川町三丁目八番地

發 行 者 河 出 孝 雄

東京都文京區柳町二六番地

印刷者 山 元 正 宜

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八
株式會社

河 出 書 房

電話東京(29)三七二一番

目次

青	
春	三

霧	
水	一三一

文學論	二四一
-----	-----

芥川龍之介	二四二
-------	-----

小説に見る傳統の問題	二四七
------------	-----

作家と私生活	二五三
--------	-----

文藝時評	二五八
------	-----

ルソオ的な幻覺	二六六
---------	-----

作家の問題	二七五
心境型と戯作型	二八三
父祖の血	二八六
小説における性の倫理	二八九
有島武郎	二九八
作家は何を爲し得るか	三〇七
藝術の思想	三二五
ジイドとソヴェト	三三四
解説	三三一
瀬沼茂樹	

青

春

作者の言葉

人の生涯のうち一番美しくあるべき青春の季節は、おのずから最も生きるに難かしい季節である。神があらゆる贈り物を一度に人に與えてみて、人を試み、それに壓し潰されぬものを捜そうとでもしているかのように、その季節は縁と花の洪水になつて氾濫し、人を溺らせ道を埋めてしまふ。生命を失うか、眞實を失うかせずにそこを切り抜ける人間は少いであらう。

人の青春が生に提出する問題は、生涯のどの時期のものよりも切迫しており、醜さと美しさが一枚の着物の裏表になつていゝような惑いにみちたものだ。モンテニニが、人は年老いて怜悧に徳高くなるのではない、ただ情感の自然の衰えに従つて自己を統御しやすくなるだけである、と言つてゐるのは多分ある種の眞實を含む言葉である。青春には負擔が多すぎるのだ。しかもその統御しやすくなつた老人の生き方を眞似るやうにとの言葉以外に、どのような教訓も青春は社會から與えられてゐない。それは療法の見つかるあてのない麻疹のやうなもので、人みながとおらなければならぬ迷路と言つてもいいだらうか。

若し青春の提出するさまざまな問題を、納得のゆくやうに解決しうる倫理が世にあつたならば、人間のどのような問題もそれは、やすやすと解決しうるであらう。青春とは、とおろすぎれば濟んでしまふ麻疹ではない。心の美しく健全なひとほど、自己の青春の中に見出した問題から生涯のがれ得ないやうに思われる。眞實な人間とは自己の青春を終えることの出来ない人間だと言つてもいいであらう。

私は、初めての試みである比較的長いこの物語で青春という主題を扱うにあたつて、どの人物にも明確な道を示してやることができなかった。その上、あるいは性急に、あるいは拙くもの語つてゐるかも知れない。だが私は、その人物たちとともに青春に加えられる出口の分らない苦惱に對する告發者の役目を貰つて出ようとした。若い人間とはすべての安定さから見すてられた人間であるという訴えを、作品のなかに盛りあげることでこの作品を書いた。

私は青年が思想の昏迷に陥つてゐるとか、自意識の過剰によつて妥當な行爲から切り離されてゐるなどという種類の非難を當らないものと考えてゐる。善と惡との判斷を強要するものが、彼等の身ひとつのことに關してすらあまりに多すぎ、かつ重すぎるのだ。しかも、そういう判斷を抜きにしての行爲が、十分なものであると言われないことは

明らかである。最もよく考えるものが、やがて持つべき行為の情熱を最も強く信じてゐるものであらうからだ。

この小説は、昆蟲が蝶になつて繭を食い破つて飛び出ようとするのに似た青春の一時を描いたものと言つていいだろう。人間という認識力を持つた昆蟲は、自分の繭を透明なものとし、その中にいて外界を見て識別し、準備し、また豫想する。しかもすでに繭の外へ出た仲間の味やつてゐる外界の殘忍な秩序をも彼は知つてゐる。彼は生きようとするならば、その不安な、怖るべき外界に出て行つて觸れることを選擇する外に道はないのである。

そういう時期の自己の存在と認識との食いちがいに直面する人間、それが作者の描こうとしたものであつた。ただこの作品は、比較的長い物語りとして作者が初めて書いた小説であつたため、その手法は決して巧妙だとは言われない。しかし作者の考へる若さは、かゝつて初歩的な手法と合致して、一種の調和感を生んでゐるようにも思う。

此度三度目の改版を出すに當つて、作者はかなりの加筆と削除とを加えて、全體の調和感を高めることに努力した。作品の意圖が讀者に汲み取りやすくなつていれば幸である。

一九五一年四月

作 者

その日の夜、信彦は、細谷教授の宅での會合に久しぶりに出ていた。十疊あまりの書齋は、周圍を全部六七尺の高さに和洋の書物や研究用のカードの箱で埋められて、暗く重々しかった。中央の机で細谷教授は額に落ちかかる長髪に煩わされながら、イギリスの寺院建築の大きな寫眞帳をめくっていた。藤山と武光がそのまわりに肘をついてのぞき込んでいた。それは細谷教授が最近とり寄せたものであった。

「これがティタアン・アベイだ。ほぼ完全のように見えるけれども屋根は大方落ちているんだ。手前に見えるのがワイ河でワアズワスのよく散歩した處だ」と教授はめくって行つた。次にその細部寫眞があつた。「見たまえ、この穹窿は特殊な角をなしているんだ。これはソオルスベリイのカシイドラルのとは全く違う。ええと、ソオルスベリイは」と言いながら教授は忙しくめくって行つた。その出入口は一年の月の數を現わし、窓は日の數を、柱は時間の數を現わす、という美術史の講義のときの教授の鼻にかかつた聲を信彦は思い出していた。實物を見て來た人にある一種の陶醉感がいまも教授の身ぶりに漲っている。信彦は教授の手の動くさまを後から見ていたが、ふと先刻まで坐つ

ていた椅子へ戻つて、冷えかかつた茶を飲んだ。

「おい」とそのとき沖豐作が小聲で室の隅の三角棚の近くから信彦を呼んだ。茶をおいて近よると、彼はボティチェリの大版の畫集を、花瓶をおいた小机の角にもたせて膝で支えながら見ていた。彼の開いているのは、美しく燦んだ色調を生かした着色の「ウィーナスの誕生」であつた。

「いい複製だな。君はどう思うかね。僕にはこういう美の形もオブシニティーとは切りはなされないものだがね。僕には細谷さんの言葉が分らないんだ。本當の藝術は裸體を扱つても決してオブシニティーを感じさせない。尊いものを感じさせると言うけれども、僕はそうは思えない。たとえはこの繪にしても、直接に扱われているモチーフには、女性の羞恥感があると思う。そしてこの女性を美しく見せるものはこの羞恥の姿態ではないのかね。僕はそうだと思う。敏感な細心な羞恥というやつは感覺的に性につながつてゐるんだ。だからこういう表現に接しては當然我々はオブシニなものを感じすべきなんだ。だいいち、それ無しには畫家はヌウドを描けやしないんだよ。細谷教授にそれを認めさせることは無理だろうがね。そこで沖は人の悲そうな笑いを洩らした。信彦は三四歳年上のこの畫家とこの會で知り合つたのだが、學校の友人以上に親しくしていた。沖はこの街にいる洋畫家仲間であつてゐる黒鳥會の

メンバで、東京の展覧會にも幾度か出品していた。繪を賣るには多少でも知人の多いこの街が便利だというので、展覧會期のほかはこの街で親戚の雜貨屋の倉庫の隅を借りて自炊生活をしている。黒鳥會の批評を毎年きまつて土地の新聞に書く細谷教授の處には、學校の生徒の外にこの會のメンバも集まつたが沖はその定連の一人だつた。この學年末から新學期にかけてしばらく沖に逢つていなかった信彥は久しぶりで沖と一緒にたつたのである。いつも獨斷的ではあるが眞剣なものの言いかたをするこの男に、學校の友人には見出し得ない藝術的信念を信彥は感じとり、逢う度に熱心に話し合うようになった。彼は多少沖に引きずられていた。沖から受け容れるものが、まだまだあるという感じを抱き、多分の謙讓さで彼は沖に接していた。しかし沖は時として、意地悪く人を當惑させたいのか、本氣に主張するのか分らないようなものの言いかたをする。今もその例だ。そういう時信彥の唯一の對抗法は身をかかわして彼をやり過すことであつた。

沖は細谷教授に美術とオブシニティーの問題を提出してみたがつてゐるのか、と信彥はちよつとためらつた。それはしかし文學のある部分について信彥の考へてゐるものと共通の問題でもあつた。露骨に描いてオブシニティーを感じさせないのが立派な藝術だというのは藝術批評家も

よく使う言葉だが、信彥はそれに對して沖と似た疑問を抱いてゐる。細谷教授は當惑するにちがいない。だが皆を當惑させてみるという氣にもなつた。細谷教授が、たとい教室で言つてゐるのと別なものを心内に抱いていても、それを表白できないような羽目に陥れて喜ぶような沖のやり方が氣になり、俺はその時も身をかかわすのかと反省もした。それでいて彼はその言葉をとおしてやり、細谷教授に傳えてみたいという衝動に従つた。

「先生に言つて見たまえ、そのとおりを。僕は前にも君のその説は聞いているんで、同感せざるを得ない處もある。ひとつ細谷先生に君から當つて見たまえ。往きて巷にそを試みよ、と言うところだね。」

沖は信彥の顔を見て、にやりと笑つた。やつて見ようか、という惡戯兒らしい顔になつた。髪をむしやくしやに伸ばし、不精髭を口の周りに二三分の長さに生やしてゐる沖の顔が、その笑いと一緒に變に少年らしい稚さを帶び、垢が浮いて見えるような蒼白いその顔には毒舌に似合う何かがあつた。沖の生活の形には、自分をいためていなければ安心できないような被虐性を感じられる。

室の奥の扉があいて、細谷教授の妹の美耶子が、錫の盆にサンドイッチを盛つて現われた。美耶子は五尺二寸ぐらいあつて、女としては長身だつた。肉づきのいい面長の顔

に、美しくはあるが強すぎるくらいはつきりした大きな眼が際立つている。よく黒い着物を着る人だな、と信彦は思ひ、

「おい美耶子女史はまた黒い着物だな。いつもじやないか」と彼は沖に囁いた。

ポケットから煙草をとり出して火をつけていた沖は、煙に眼を細めていたが、煙草を銜えたまま口の反對の隅から、聞きとりにくく答えた。

「染色をやつている高等工業學校の生徒がそんなことを言つちやいけないよ。あれが黒なもんか。日本の昔からなる紺だよ。」

彼女は氣をつけて本を片附けながら、皆がとり巻いている大きな机の端に盆をおいた。

「ごめんなさい。召しあがりものを持つて來ましたわ」と言い、美耶子が教授の方へ盆を押しやるのを信彦は横から見ていて、その着物が深い紺へ薄のような黄色の筋を縦横に散らした紬の一種であることがわかつた。

「それでは、サンドイッチでも食べましょうか、諸君」と細谷教授は言つて、離れた處にいる沖と信彦の方を見た。

「はあ」とすぐ中央の机に近よつたのは信彦であつた。沖はじつとしていた。沖は自分流の沈黙のなかにいる時は、容易に外部からの言葉で動かないのだが、今日のそれはこ

れから言い出すことを意識してのことのように思われた。

「神津さん、沖さんと呼んで下さいな。なかなか動かない方ねえ」と美耶子は沖の方を見ながら信彦に言つた。聞えるぐらいの聲であつた。立つて沖の方に眼をやつている彼女の姿は、腹を立てたようにきつとした處があつて、喉から頸のあたりが、机の中央にあるスタンドの灯を下から浴びて白く浮き出した。

「繪描きというものは規律が嫌いなんですな」と説明しかけたが、ふと信彦は氣が變り、美耶子のきつとなつてゐる態度に、ぶつつけるように「駄目なんですよ、あの男は。人に與える抵抗をたのしんでるんですよ」と言つた。きらりと美耶子の眼が自分に投げられたと思ひながら、彼は辛子のよく利いたサンドイッチを食べた。美耶子はまだ沖をにらむようにして見ていた。

「おい沖君、美耶子女史が、言うことを聞かないといつて御立腹だぜ」と、がつしりした身體を行儀よく制服に包んで、きちんと坐つた武光が沖の方を見ずに太い聲を出した。

「あ、腹が空いてなかつたものですから」と沖は漸く畫集を閉じて腰をあげた。沖は彼の方を立つて見ている美耶子を超えるように前屈みになつて椅子や本の堆積の間を机のところまでやつて來た。髪が亂れていて、眠たいような顔

になつていた。脊が低くはないのだが、美耶子の前をとおるとき、屈んだ姿勢のせいか彼女よりも低く見えた。

「君はこの頃熱心に描いているそうですね」と細谷教授が沖の方を見て言つた。教授は美耶子によく似た顔だったが、色が黒いので、ちよつと見には憂鬱に神経質に見える。しかし教授の瞳は明るくあけつばなしの性質を現わしていて、この人の前では悪い考を抱かないように人に強いるところがある。

「ええ、然しどうも繪が變りかけているので、色々なことで困つてゐるんです。あれですね、細谷先生、僕はこの頃になつてから、美の意識というやつはオブシニティーの半面ではないか、という考を持つようになつたのですが、悪いでしようか？」

武光五郎はいかにも先生の前にいるという風に窮屈そうに坐つていたが、きらりと怒つたような眼なごしを沖に投げた。美耶子は机をはなれ、室の隅のガスストーヴにかけたポットから茶を皆の茶碗に注いでいた。

「自然の美というやつは、じや、君の意見ではどうなるんだ」と甲高い女性的な聲で、隅の方で椅子の背によりかかつていた背廣姿の庄司が言つた。彼はこの高等工業學校の十數年前の卒業生で、母校にもう長いこと實驗室助手と參考館の整理係りを兼ねて働いてゐるのであつた。

「自然はですね。僕はよく考えたのですが、美術としては獨立したものに扱われていることがあるけれども、結局人間の背景にすぎないように僕は思つてゐるんです。靜物畫というようなのは、工藝品じやないか、と僕は思つてゐるんです。それで繪としての正統は人體畫なんです。ことに女性のヌウドだと思ふんです。そうすると、僕にはどうしてもオブシニティーの意識なしには描けないんですよ。」

眠つたような顔をして、ぼんやりと言つた沖の言葉の裏側に妙な執念があつて、それが皆にすぐ感じられた。彼に答えるならその執念のようなものを何とか捌かなければならない。庄司はそのいやなものに衝き當りたくないとしてもいうように沈黙した。この場でその論旨だけをまつすぐにとり扱えるのは、細谷教授だけだつた。武光も身じろぎをしたけれども、汚ならしいというように眼の隅で沖を睨んだだけでやめた。信彦は、自分が沖と同じことを言い出したように固くなつていた。

「それは君が批判者の立場でなく、制作者の仲間に加わつてゐるからだ。僕もそういう心理的な動きを全く否定はしない。けれども衝動というものは高められなければならぬんだ。そりや衝動の量の問題でなくつて、質なんだ。だから僕は昇華ということをいつも言つておる。昇華というのは、人間の肉體的な衝動の質を、藝術的なものに變質さ

せることだ。そののできるのが藝術家だというべきなんだね。人間的な世界が藝術の中心だということは、君の言いかただと少し過度になるけれども、ほぼ僕は君に賛成していい。しかし出来た作品がオブシニティーに止まつていることが最上の状態と言えないことは事實だね。君の説は一つの経験者の聲として僕も参考に聞いておこう。しかし。」

そのとき大机の反対側に沖と並んで腰かけていた學生の藤山が隣の沖を振り向いて、

「じゃ、君、あれかい。君はこの頃裸體畫なんか描いてるのか？」と言つた。ちやうど細谷教授の聲の切れ目で、皆がひつそりしていた時だったので、それが案外に大きく響いた。口をもぐもぐさせていた武光が先ず笑つた。庄司の細い笑聲がそれに和した。藤山は笑いに誘われながらすこし赤い顔をしていた。信彦は自分の顔がひどく赤くなるのに困つた。彼も藤山と同じことをちやうど考えていたのだ。

また美耶子が皆の前に新しく淹れた茶を配つていた。後から彼女が信彦の肩越しに茶碗を伸ばしてよこした。信彦はちやうどその時赤くなつていた頬を美耶子に見られたように思ひ、すっかり困惑して、眼のやり場に困つていた。そのとき、庄司が笑聲をうち消すように喋り立てた。

「細谷先生、しかし沖君の説は亂暴ですな。美意識と生理的衝動と同一視するということには僕はとても賛成できません。たとへばです、ここにある壺ですね。これの美しさは何も人間の生理と關係がないでしょう。文學ではどうなるのかね」と言つて、庄司は生徒の仲間で文學青年としてとおつている神津信彦の顔をちらと見た。だが茶を配り終つた美耶子に隣に坐られた信彦は頬のほてりが去らず、戸惑ひした表情が顔一ぱいに漂つてゐる。それが庄司にはひどく子供らしく見えた。庄司は言いつづけた。

「文學の感動は決してそういうものとは縁がないでしょう。煽情的な文學というものは決して第一流のものではない。文學の與える感動はもつと倫理的なものじゃないですか。そして生理的な汚れから、高い處へ抜け出るように人間を動かすものでなくつては、繪にしろ音樂にしろ第一級のものではない、と僕は思う。」

美耶子は信彦とならび、庄司の眞正面に腰かけ、眼を伏せて、テュブルの上をじつと見ていた。それに氣がつくと庄司はちよつと怯んだように口をつぐんだ。机の端にいる沖は先刻藤山が笑いのきつかけをつくつた間にも答えず、ぼんやりとして、言われているのは自分のことでないともいつた様子だつた。細谷教授が言つた。

「庄司君、そりや關係が全くないとは言えないんで、君も

言っているように、人間性を高める働きは大いに認めるべきだが、僕が多少沖君の説に聽く所以はだね、その生理的衝動そのものがなければ創作の發生はないという裏からの意味なんだ。案外に一般的な眼からすれば汚ならしいものが制作を直接に助けているかも知れない。僕はそういう場合、一般的な潔癖さもちがった美意識の設定を望んでいるわけで、その僕流の考えにおいて、ともかくもよき藝術を産むものは美の意識でなければならぬ。だから少し強く言えばだね、沖君は自分の美意識を一般的なフィリスティンの標準に持つて行つて並べるから汚いように思ひ込んでしまわざるを得ない。若し沖君の制作がよいものであれば、それは必ず藝術論的には美しいものに根ざしている筈なんだね。ところで文學論にまでなりそうだが、神津君どうかね、庄司君の意見については何か考えないか？」

信彦は美耶子と並んで坐っていることから感じた羞恥心とは別に、自分の内部からある傲慢な心が頭を擡げて來るのを感じた。自分の前にいる庄司から見れば、自分がいま美耶子に並んで坐られたことをただ子供っぽく含羞んでいるだけに見える。その印象を無理に直してしまふほどの氣持にはならなかつた。とにかく美耶子と並んで含羞んだという事實は消しようがない。藤山の愚劣な戯談で彼と同じことを考えていた氣持の虚を衝かれ、それを美耶子の前に

曝したという意識から、彼の含羞みは止めようがなくなっているのだ。そういうことに氣の附かぬらしい細谷教授の言葉は、彼がずつと自分の内側に押込んでおいた骨つばいものにじかに觸れたように思われた。かと言つて、彼の言ひ出すのを待ち構えているらしい庄司の氣配を見てとると、ばからしい、という反省で自分を抑える氣になつた。

こういう子供っぽく見える含羞みと傲慢さとの奇妙な交流を、信彦は自分でも妙だと思ふのだ。しかしその二つには確かに一脈の聯關があつた。それは自分にだけ分つてのことだつた。美耶子が自分の傍にいなければ、俺もいま言ひ出すのだが、と彼はちらと思つた。それに自分の意見が沖の肩を持つことになるのは分つていた。沖の批判されるのを、信彦はなにか自分のこととして受け取つていたのだ。その沖の傲慢な沈黙が十分に答えているではないか。

信彦はにこにこ笑つた。自分で知つていつもの愛嬌のある笑顔だ。彼はうるさくなると、いつもこの笑顔の中へ逃げこむのである。たつた今まで含羞んでいて、そしてにこにこ笑つている自分が、素直な性質の學生として、細谷教授や庄司たちの間をおしてもらへることをも彼は心得ていた。それは信彦の身についた韜晦の表情であつた。

「さあ、よく聞いていなかつたのですが。どうも繪のこと

にまで及ぶと少し僕には範圍が廣くなりすぎますから」

「沖君はどうかね、君は問題の提出者じゃないかな」と細谷教授は沖の方に向きなおつた。

沖は無理に自分の隅つこから引つぱり出される猫のような迷惑そうな顔になつた。

「僕には自分のやつていることしか分らんのですが、美の意識というのは陰蔽から露出への推移かその逆の推移のうちにあるように思われるんです。だからその、悪いことをしているという氣持でもつて繪を描く。これに僕は困つているんです。繪をやつてゐる外の連中にも訊いて見るんですが、彼等はですね、長年繪を描いてゐる連中は、そういう感覺が麻痺してゐるようなんです、僕の疑問には答えがでないのですが、彼等はモデルの裸體に面してもそれが當然のことだと思つてゐる。驚異感を失つてゐます。それで彼等は碌な繪が描けないのだ。と、これはいつか僕が神津君に話したことなんです。しかしどうもこういふ問題は、今日ここで提出するのは妥當でありませんでした。」

「いやそんなことはない」と、細谷教授はいつにもなく強い聲で言い、不愉快そうに黙り込んだ。沖のこの種のこだわりは、皆のよく知つてゐることであつたが、彼は意志の量だけで人に壓迫感を與えるのだが、心に抱いてゐることの全體はあまり人に示さない癖があつた。それは陰險とい

うものではなく、信彦と二人でゐる時など、素直に思うことをよく喋るのだが、皆と一緒にになると、彼の態度が何となく頑なになるためであつた。

「ねえ、お兄様、もうお話はやめて麻雀にしていかが？」と美耶子が言つた。

「麻雀がいいか。ブリッジがいいか、どつちにしようねえ。どちらにしても」と教授は皆を見まわして「どうせこの人數では兩方ゐるね」

美耶子は室の隅に麻雀卓の支度をする、信彦のところへ来て、

「私たち藤山さんと沖さんとでこないだの續きをしましうよ」と、勝手に麻雀仲間をきめてしまつた。

麻雀の牌を器用に積みながら藤山が獨り言のように沖の前で言うのであつた。

「沖君の議論はあれだな、要するに黙々をこねてゐるのさ。藝術家と稱するものは、自分にだけ自然が特殊な相を見せるのだと思ひ込みたいのだね。と言つても沖さん、怒る必要はないよ。自分に特殊な姿が啓示されると信ずることは多分本當に啓示されてゐることになるんだからな。藝術家という奴は理論嫌いなさ。なぜつて、理論というのは今までにあつた藝術から歸納された通則なんだからね。通則は天才を規定せずさ。」

「また藤山さんの理窟ね。あんたの理窟は言つてしまつても言わなかつたのと同じことのような氣がするわ」と美耶子が骰子を振り、目で沖の番を知らせながら言つた。向うの卓で骨牌を切つている武光がそれに應じた。

「藤山の美事な理論は、理論のないのと同じ位に平明である。」

細谷教授がうふふと笑つた。

「そうひやかさんで聞いて下さいよ。僕は信念をもつて言つてゐるんです。それは、つまり通則からはみ出すことによつて、自分の特殊な資質を確かめたいとどの藝術家でもが本能的に思う。だから必要以上に藝術家は常規にはずれたことを言い、かつ行動する。藝術家はそういう譯で理論嫌いなのだ。理論で仕事ができない、とは彼等の常に口にする處なのさ。しかし本當に理論が仕事の邪魔になつてゐるのはちがう。その證據にはだね、新しい藝術の流派はきつと新しい理論とともに現われる。理論を嫌う藝術は悉く革新派ならざるものに限るようだ。どうですか先生、こういう意見は。」

「それでは君は沖君が傳統的な畫家だと言いたいのかね、それとも革新的な畫家だと言いたいのかね？」

「それは沖君の氣持次第ですね。沖君がさつきの話を理論否定の氣持で言つてゐるならば、傳統的な畫家ということ

に近いですね。だがあの感覺論から新しい理論を導き出したと思つてゐるのなら新しいエコオルに入るべき人だと思ふ。沖君、どつちですか？」

沖は麻雀に熱中して藤山の言うことに耳をかさない恰好だつたが、不精鬚の生えた顎をそのとき藤山の方に突き出して、うふふと笑ひ、

「どつちになつたらいいかと思ひ惑つてゐるところなんだよ。しかし、おのずからきまつてゆくだろう。僕にしたつて、君の理論を、うまく成り立たせるために生きるわけにはゆかないからな。」

麻雀の卓とブリッジの卓とに笑ひが湧いた。手にしていた札を見較べて考え込んでいた細谷教授が、ひとり皆の笑ひの靜まつたあとで、はははと笑ひ出し、それが調子はづれなので、皆がまた笑つた。

病弱であり客に顔を見せない細谷夫人が笑ひに誘ひ出されたように出て來て挨拶し、新しく茶を淹れてくれた。

*

歸りは十時近かつた。玄關で靴をはいてから細谷教授と何やら立話をしてゐる庄司を残し、信彦は沖と藤山と武光と四人で外へ出た。夜風が幕のように角を曲つて彼等をおし包んだ。それはひやりとした冷たさではあるが、どこと

なく遠い南の國の春のあたたかい夜を思わせるぬくもりがあつた。公園を抜けて行く道があつて、そこは寂しいがこの住宅地から街へ出るのに近いのであつた。沖をのぞいた三人はこの街の同じ中學校を出て、高等工業學校へ入つたので性格や境遇はちがつているが、何かと一緒に集ることが多いのであつた。スポーツマンでスキイの選手である武光は、この街の大きな菓子製造業者の次男である。藤山は退職官吏の一人息子で、小柄な身體と病的なほど白い面長の顔を持つた青年であつた。學校では秀才としてとおつており、自他の性格解剖をよくやりたがる饒舌な一面があつた。しかし彼自身は結局健全な人間で、その饒舌は一種の知的な飾りになつていて、自分は溺れないのであつた。中學校以來信彦はそういう藤山の影響を色々な形で受けたし、また一番親しい友人でもあつた。しかし信彦は自分の方が藤山の言葉に溺らされそうなので、この友人が不安になつて來ていた。無駄な言葉の遊戲からのがれたいという氣持で彼はこの頃學校の友人とはあまり交際せず、藤山とも以前のようには親しく往き來しなくなつていた。なにかもつと外の世界を見たいという氣持である。そういう彼の氣持に沖がひとつの窓をつつてくれたのである。

四人は無言のうちに公園を抜ける近道をとつた。信彦は麻雀で勝つた興奮がまだ靜まらずにいた。彼が千點ほど勝

ち、美耶子がその次で五百點ほどだつた。沖が一人で負け込んでいた。沖にすれば珍しいことで、彼は眠つたような顔で面倒くさそうにやつていても、勝負ごとには強いのであつた。そういうことに勘がいいというのか、初めは信彦が教えたのだが、ルウルなど忽ち覺えて何年も前からやつている者のように落ちついた牌の振りかたをし、すぐに街の麻雀俱樂部へも出入りするようになった。その沖が今夜は三度も大きな牌を放り込んで、一人で拂つている形になつた。何となくいつもと調子が變つていた。熱心なのか、投げてやつているのか、彼の顔や態度では見分けがつかなかつた。

「ああ、學校ももう一年だな」と砂利を靴でざくざくと踏みしめていた藤山が言つた。彼は人が何人か集ると、きつと一番目立たない隅にいたのである。小柄な彼にはそれが似合つていた。その隅つこから、時として彼は座のものを笑いか議論かに誘い込む妙な發言をする癖を持つていた。今夜も、夜道を四人並んで歩けば藤山は一番暗い山側の崖下を歩いてゐた。遊び疲れたようにものを言わない皆の中で信彦が、あと一年になつた自分たちの在學期間のことを考へていると不意に藤山はそれを言い出したのであつた。

藤山と自分との考へが妙に一致するということに、この頃信彦は多少の嫌惡をすら覺えるのだ。長いあいだ親しく